

## 小説『静けさの形 一第七戦・十一回裏の一球について』

### 第一章 波のような歓声の外側で

球場のざわめきは、巨大な波のうねりのようだった。  
しかし、マウンドに立つ山本由伸の耳には、  
その音がどこか遠くの世界のもののように感じられていた。

十一回裏、一死一、三塁。  
勝てばワールドシリーズ二連覇。  
負ければ、一年のすべてが静かに霧散してしまう。

だが、その重みは彼の心の内側にはほとんど入り込んでいない。

指先についた土を軽く払ったとき、  
彼が感じたのは、プレッシャーではなく、  
少年のころ、校庭で投げたボールの匂いだった。

——あのころは、ただ投げるのが嬉しかった。

そんな記憶の断片が、ふいに意識の隅で音を立ててよみがえった。

この瞬間、  
彼は世界シリーズのマウンドに立つプロの投手でありながら、  
同時に“ただ野球が好きだった少年”でもあった。

### 第二章 心理の深層で起きていたこと

—自己超越とは「戻ること」である—

極限の場面で、一流選手が“原点の自分”に戻ることがある。  
それを心理学ではしばしば自己超越(self-transcendence)と呼ぶ。

人は極度のプレッシャーに晒されると、  
意識の外側にまとわりついていたもの——  
役割、肩書き、期待、プライド——  
そうした“大人の構造”が一時的に剥がれ落ちる。

そして残るのは、  
ただ「これが好きだった」という最も純粹な核。

山本由伸の  
「もう無心で。野球少年に戻った気分だった」  
という言葉は、この心理プロセスを驚くほど正確に言い当てている。

努力と緊張が頂点に達したその先で、  
人は原点へと帰る。

これは技術ではなく、“在り方”的問題なのだ。

### 第三章 指先の記憶とミットの一点

キャッチャーミットの中央にある小さな黒い影——  
それが、彼にとってすべてだった。

そこに投げ込むという一点だけが、  
他のすべてをかき消した。

観客席のざわめきも、  
走者の存在も、  
ゲーム状況の重さも、  
未来の結果も。

ミットへ吸い込まれる直前の球の縫い目と、  
指先の記憶がつながる感覚。

この世界には、  
投げる者と、受ける者の二つだけがあればいい。

そう思わせるほどの静けさが、  
あの場面にはあった。

### 第四章 打球が転がるまでの永さと短さ

腕を振った瞬間、時間は奇妙な二重構造を持った。

一方ではすべてが緩慢に、  
もう一方では驚くほど鋭く流れた。

ボールが地面へ弾み、  
ショートが前へ出る動きは、  
無駄がなく、過不足がなかった。

すくい上げるように捕球したショートは、  
滑り込むことも、慌てることもなく、  
軽やかなステップで二塁の白いベースに触れた。

そこに焦りの影はなかった。  
動作と目的が自然に一致していた。

続く送球もまた、  
身体の流れに沿うように、一塁へ送り出された。

スムーズというより、  
“流れる”という言葉の方が似合っていた。

一塁手のミットがその白い球を受け取った瞬間、  
ワールドシリーズの終わりと、  
新しい記憶の始まりが同時に訪れた。

## 第五章 美しい動作とは何か

美しいプレーとは何か。

それは、  
意志と身体が摩擦なく一致している状態だ。

山本自身の投球だけでなく、  
あのショートの動作もまた、  
同じ静けさの延長にあった。

プレッシャーに押しつぶされるのでもなく、  
勝利をもぎ取ろうと過度に力むのでもなく、  
ただ最適解へと身体が自然に向かう。

この“自然な集中”こそが、  
自己超越のもう一つの顔である。

個人の意識が薄まり、  
世界と同じテンポで動けるようになる瞬間。

それは努力の延長線にありながら、  
努力だけでは到達できない場所だ。

## 第六章 歓声が戻っても、内側は静かなまま

一塁アウトの瞬間、  
球場のすべての音が一気に押し寄せた。

歓声、叫び、拍手、音楽。  
すべてがひとつになり、スタジアムを揺らした。

だが、山本の内側には依然として静けさがあった。

興奮よりも、安心に近い何か。  
勝利よりも、帰郷に近い何か。

あの一球は、彼にとって  
“自分を越えた瞬間”ではなく、  
“自分に還った瞬間”だった。

だからこそ、  
あの淡い手応えは忘れられないものとなる。

## 第七章 自己超越という「帰還」

私たちは、自己超越を“高みへ登る行為”として捉えがちだ。

しかし本質は逆だ。

自己超越とは、  
“余分なものを脱ぎ捨て、根源へ帰ること”である。

背負ってきたものが大きいほど、  
人が帰るべき核心はむしろ、小さく、そして驚くほど軽やかになる。

山本由伸は、  
努力を積み重ねた結果、  
努力を意識しなくても動ける地点に到達した。

その瞬間、  
少年としての純粋さと、  
プロとしての技術がひとつに融合した。

まさにそれが、  
あの軽やかなダブルプレイを呼び込んだのだ。

## 第八章 静けさの形としての一球

野球とは、音のスポーツだ。  
打球音、歓声、捕球音、サインの合図。

しかし、  
野球の核心にあるのは“静けさ”だと、  
この一球は教えてくれる。

プレッシャーの頂点で現れた静けさ。  
投げたあとに訪れた静けさ。  
結果が決まった瞬間にも消えなかつた静けさ。

そしてその静けさは、  
選手だけでなく観る者にも  
深い余韻を残す。

あの一球は、  
技術の頂点でも、運の産物でもなく、  
静けさが形を持った瞬間だった。

## 終章 私たちはなぜ、あの瞬間に心を奪われるのか

なぜ、あのダブルプレイはこんなにも美しかったのか。

それは、  
人が“何かを超える”瞬間ではなく、  
“何かへ帰る”瞬間を見たからだ。

人は根源へ帰るとき、  
最も自由で、最も強く、  
最も美しくなる。

山本由伸の十一回裏の一球は、  
その証明だった。

そして私たちは、  
その美しさに触れた瞬間、  
自分の中にある“原点”もまた  
そっと振り起こされることに気づく。

——ああ、そうだ。  
何かを好きだった最初の瞬間は、  
こんなふうに静かで、美しかったのだ、と。

—終わり—

Stories on the way.

## 補章 静けさのあとで — 寄り添いとキャリアの話

キャリアという長い時間にも、あの一球の静けさは宿る。

あの十一回裏の一球は、  
ただのスポーツの瞬間ではなかった。

私たちが日々向き合っている  
仕事、キャリア、人生の選択  
そのすべてに通じる“心の構造”が刻まれていた。

### I. 人は、ときどき「余分な自分」を背負いすぎる 仕事とは、役割と責任が折り重なる世界だ。

評価、成果、周囲の期待、  
自分がどう見られているかという意識、  
「こうあるべき」  
「失敗できない」  
そんな思いが蓄積し、  
気づけば“本来の自分”的輪郭がぼやけてしまう。

けれど、山本由伸が示してくれたように――

時に人は極限に追い詰められたとき、  
不思議なほど純度の高い原点へと戻る。

それは弱さではなく、  
本当の強さに触れる瞬間だ。

### II. 原点に立ち返ることは、キャリアの中でも起こる 転職を考えるとき、 昇進の重圧に耐えるとき、 部下育成に悩むとき、 自分の役割と感情が絡まり合い、 自分自身が見えなくなることがある。

しかし、進路に迷う多くの人が  
最後の最後に口にする言葉は、  
驚くほど共通している。

「自分は本当は、何が好きだったんだろう」

この問いこそ、  
キャリアの自己超越に最も近い。

山本があの場面で直感的に辿り着いた“原点”は、  
誰にでも起こりうる  
キャリアの“帰還点”でもあるのだ。

### III. プレッシャーの頂点では、むしろ人は静けさを得る

昇格試験、重大プロジェクト、  
キャリアの岐路での決断——  
そういう極限に近い時間は、  
心が揺れ、混乱し、焦りを生み出す。

だが、そこを越えた先にだけ現れる静けさもある。

山本の一球に宿っていた静けさは、  
プレッシャーがないから訪れたのではなく、  
プレッシャーの総量が限界点を超えたときにだけ現れる“心の解放”だった。

キャリアも同じだ。

迷いが深まりすぎた結果、  
人は逆に“自分がどこへ戻るべきか”を  
はっきりと見つけることがある。

あれは敗北ではなく、  
成熟の証だ。

### IV. 努力の頂点で、人は努力を忘れる

山本が投げたあの一球は、

努力で作り込んだ技術ではなく、  
“努力を意識しない地点まで到達した技術”だった。

キャリアもまた同じである。

学び、経験し、失敗し、  
もがき、積み重ね、  
それでも迷い続けたその先で——

ある日ふと「自然にできている」感覚が訪れる。

あの一球がそうだったように、  
努力とは、  
意識しなくなるまで積み重ねた先に初めて花開く。

## V. 静けさは、人生の最重要的指針になる

多くの相談者が、  
キャリアに悩む理由のひとつは、  
内側の静けさを見失っていることだ。

周囲が騒がしく、  
世界が速すぎるときほど、  
人は静けさから遠ざかる。

だが、本当の方向性は、  
派手な成功や賑やかな声のなかにはない。

山本由伸の一球が示していたように——  
本質は、静けさとともに姿を現す。

静けさは「逃避」ではなく、  
「選択の根拠」であり、  
「内側の羅針盤」なのだ。

## VI. 原点へ帰ることは、前に進むための条件である

あのダブルプレイの美しさは、

選手の技術の結晶であると同時に、  
“原点へ戻る勇気”の結晶でもあった。

キャリア相談でも同じことが起こる。

自分のやりたいことを忘れた人が、再び思い出す瞬間  
自分の弱さを受け入れ、静かに歩み始める瞬間  
他者の期待から離れ、自分の人生を選ぶ瞬間

これらはすべて、  
山本由伸の「野球少年に戻った感覚」と同じ構造を持つ。

キャリアに迷う人を支援するとは、  
その静けさへ戻る道を探す旅の伴走者になることだ、と  
この一球は教えてくれる。

終わりに — 静けさは、人生のなかで最も確かな場所である

あの一球は、野球の歴史に残る瞬間であると同時に、  
人が“自分”へ帰る道筋の象徴でもあった。

私たちもまた、  
迷い、焦り、揺れ動く日々のなかで、  
何度でも原点へ帰ることができる。

静けさとは、  
弱さではなく、  
本当の自分へ帰るための最強の場所なのだ。

そしてその静けさに触れたとき、  
人はようやく前へ進むことができる。

山本由伸の一球は、  
その真実をあまりにも美しく示していた。

キャリアの旅もまた、静けさへ帰る旅である。

本作品の著作権は著者に帰属します。無断転載・引用・複製を固く禁じます。